国語

（1～17ページ）

注意

1　試験開始の合図があるまで、問題用紙を開いてはいけません。

2　解答用紙に受験番号・氏名を記入してください。
受験番号は、下記の「受験番号欄記入例」に従って正確にマークしてください。

3　解答用紙にはマーク式解答欄の番号が 1 ～ 75 までありますが、使用しない解答欄も含まれています。

4　試験時間は**六〇分**です。

5　試験開始後、問題用紙に不備（ページのふぞろい・印刷不鮮明など）があったら申し出てください。

6　中途退出は認めません。試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

解答用紙の受験番号欄記入例

受験番号欄				
1	2	5	9	6
⓪	⓪	⓪	⓪	⓪
●	①	①	①	①
②	●	②	②	②
③	③	③	③	③
④	④	④	④	④
⑤	⑤	●	⑤	⑤
⑥	⑥	⑥	⑥	●
⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
⑨	⑨	⑨	●	⑨

数字の位置に注意してマークしてください

マーク式解答欄記入上の注意

1. 解答は，ＨＢの黒鉛筆を使用して丁寧にマークしてください。
《マーク例》
良い例 ●
悪い例 ⊘ ⊙ ⊘ ◑
2. 訂正する場合は，プラスチック消しゴムで，きれいにマークを消し取ってください。
3. 所定の記入欄以外には，何も記入してはいけません。
4. 解答用紙を汚したり，折り曲げたりしてはいけません。

I　次の問いに答えなさい。

問1　傍線部の漢字の読みとして正しいものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

1　各国が覇権を争う。
① じっけん　② せいけん
③ はけん　④ ほうけん

2　紆余曲折を経て今日がある。
① きょくしょう　② くっせつ
③ きょうせつ　④ きょくせつ

3　損失を補塡する。
① ほてん　② ほしょう
③ ほじゅう　④ ほひつ

問2　傍線部の語句の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

4　木で鼻をくくった言い方をするものではない。
① 途切れ途切れの
② 不明瞭で曖昧な
③ 無愛想で冷たい
④ 尊大で偉そうな

5　彼はいち早く頭角を現した。
① 先頭を歩きだした
② 才能が目立ってきた
③ 最高得点を出した
④ 本音で話をした

6　いまさらながらほぞを噛む。
① 後悔する
② やり直す
③ よろこぶ
④ 決意する

Ⅱ　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

伝統的に、科学研究は閉ざされたコミュニティで推進されるものであり、大学をはじめとする研究機関で教育を受けた特別な人々によって担われる活動である、と考えられてきた。このような発想を前提とするとき、[注1]ＰＵＳは、専門的な知識の欠如している市民に対して、専門家がその知識を補完する、という枠組みのもとで行われることになる。科学技術社会論において、このような枠組みは「欠如①モデル」と呼ばれる。欠如モデルは、科学者による専門的な情報提供が必要であるときには有効であるが、市民の属する文脈に依存した知を無視し、市民を受動的な役割に留めることにもなる。それに対して、こうした文脈に依存した知を重視し、科学的な専門知の権威を相対化することによって、専門家と市民の間の双方向的なコミュニケーションを実現することで、はじめて科学の社会的受容をめぐる有効な議論が成立する、と考えるものを、「市民参加モデル（Public Engagement Model）」と呼ぶ。[注2]②「ゲノムひろば」の取り組みは市民参加モデルに基づいてＰＵＳを促進する試みであると言える。

二〇一〇年代以降、科学技術の[注3]ＥＬＳＩへの取り組みにおいて、市民参加モデルに基づくＰＵＳの重要性は強く意識されてきた。また、科学技術の社会的受容を開かれた議論によって進めようとする考え方は、[注4]技術官僚モデルに対して、科学技術のガバナンスにおける「民主主義モデル」とも呼ばれている。

ただし、そのように科学技術をめぐる議論への市民参加を推し進めることは、当然のことながら、③専門家の権威を相対的に低下させることになる。そしてそれは、科学的事象に対する市民間の意見の対立が調停できなくなり、またそうした対立そのものが、政治権力によって利用される危険性を含んでいる。[注5]吉澤が指摘するように、このような傾向が「ポスト真実」と呼ばれる近年の現象と重なり合うとき、それは大きな脅威となりうる。たとえば、ドイツの極右政党「ドイツのための選択肢（Alternative für Deutschland：ＡｆＤ）」の前共同代表者であったフラウケ・ペトリーは、気候変動に反論し、定説は事実でないという「別の真実（Alternative Facts）」を提示した。彼女の言説は、主流の言説への信頼性を低下させ、市民に対して「どっちもどっち」という印象を与えることになる。そのような泥仕合を前にした市民は、自らの政治的信条によって「科学的真実」を選択することになる。

一方で、科学者の相対的地位の低下と軌を同じくして立ち現れた「別の真実」的言説に対する反動として生じつつあるのは、科学技術をめぐる意思決定において専門家の権威を再び取り戻そう、という志向である。たとえば二〇一七年五月の[注6]アースデイにおいて、「科学のための行進（March for Science）」が行われ、「別の真実」を掲げる為政者への抗議として、あくまでも科学的な根拠に基づく意思決定を訴えてデモ活動を行った。また、環境活動家として知られるグレタ・トゥーンベリのいう「［　Ｘ　］」という主張も、このような志向を象徴するものであろう。もちろん、科学者の専門的知識は重要である。しかし、科学はそもそも動的な営みであり、そこにはつねに見解の対立や論争が存在しうる上に、科学者自身の見解そのものも政治的言説から完全に自由ではない。そうした性質を無視し、「ポスト真実」に対して科学が客観的な真実を提供してくれる、と信じることは、安直な発想であるという誹りを免れないだろう。

それでは、科学技術の意思決定を技術官僚モデルへと退行させることなく、しかし「ポスト真実」的な科学への不信感に陥るのでもない仕方で、市民に

開かれた議論を成立させるためには、何が必要なのだろうか。それを見定めるためには、そもそもまず、科学技術をめぐる公共的な議論が直面する、上述のような苦境が、なぜ、いかにして出現しているのかを把握する必要がある。私見では、このような苦境は、偶然に生じたものではなく、科学技術について議論しようとするとき、A原理的に生じうる問題として理解されなければならない。以下では、注7アーレントの著書『人間の条件』を手がかりにしながら、そうした問題の構造を明らかにしていこう。

『人間の条件』において、アーレントは科学技術によってもたらされる危機として、その物理的な威力とは別に、政治的な公共性への脅威をB洞察している。以下では、そうした脅威が出現してくる過程を、同書の第六章の議論に基づいて概観する。

科学技術は近代科学の発展の帰結である。その発端は、注8ガリレオが望遠鏡によって天体観測を行った、という出来事のうちに見出(みいだ)すことができる。アーレントはこの出来事を、天文学において地球がその外側の視点から捉え返された、という意味で、注9「アルキメデスの点の発見」（『人間の条件』）と表現する。すなわち近代科学は、地球を中心とした世界観から脱却し、脱中心的な宇宙観に基づくことによって、はじめて開始された。アーレントはこれを「地球疎外」とも表現している。

近代科学は、真実を明らかにする方法を刷新することによって、④人間の生活に深刻な影響を与えた。アーレントによれば、ガリレオの発明の新しさは、それまで思弁や仮説の域を出なかった地動説を、望遠鏡を用いることによって、感覚的な確実さを伴った形で実証した点にある。それが意味しているのは認識の準拠点が根本的に変容したということだった。なぜなら、地球疎外をもたらす宇宙の視点は、人間自身の感覚では得ることのできないものであり、望遠鏡という技術的な器具によって初めて知覚可能になるからだ。そうである以上、科学的な探究において人間の感覚は不完全なもの、誤謬(ごびゅう)を招くものであって、それは技術によって修正され、改善されなければならない。

近代科学は、そのようにして、「人間の感覚、すなわち、リアリティを受け止める人間の器官そのものが人間を裏切るのではないかという古代の恐れ」を蘇(よみがえ)らせることになった。注10デカルトは、感覚への信頼の失墜を引き受け、新たな認識の準拠点を哲学に基礎づけようとした。アーレントによれば、デカルトは、疑うことができるものはすべて疑わなければならない、という方法的懐疑によって、人間が最終的に立脚することのできる知識の確実さの準拠点として、「われ思うゆえにわれあり」という第一原理を提示した。すなわち方法的懐疑は認識の準拠点を感覚から精神自身へと置き移したのである。それが意味しているのは、精神自身によって生み出された認識こそが確かな認識と見なされる、ということにほかならない。

アーレントは近代科学におけるこうした考え方の発露を、近代数学と実験のうちに見出す。近代数学は、自然現象を感覚的な内容を捨象した数学的な記号とその諸関係に置き換えて処理するものであるが、それはあくまでも「精神が生み出す形式に関する知識」である。また実験は、技術的な器具によって構成された人工的な環境のなかで自然現象を再現する営みであるが、それは「観察したいと願う現象や対象物を「生産するという任務」」にほかならない。

この意味において、近代科学において認識は、すべて、人間自身の精神の形式へと還元される。人間の精神に還元されないものを科学的に探究することはできないのであり、科学的な探究はどこまでいっても人間の精神を超え

ることができない。アーレントはここに一つの逆説を洞察する。すなわち、近代科学において、「私たち人間が人間でないものを探し求めようとしても、私たちが出会うのはつねに人間自身の精神のパターンにすぎない」。このような事態を、アーレントは「宇宙への飛行」であると同時に、「［Y］への逃亡」であると表現する。

ただし、前述の通り、感覚とは「リアリティを受け止める人間の器官」にほかならない。そうであるにもかかわらず、認識の準拠点を感覚から切断するということは、認識からリアリティをも剥奪することを意味する。ここからC帰結するのは、近代科学において確かであると見なされる認識が、人間にとってリアリティのないもの、すなわち「想像不可能」なものであるということである。

そうである以上、科学的な事象について人々が意思疎通するのだとしても、⑤それはリアリティのないもの、自分でも想像できないことを語る、ということになる。アーレントは、ここに⑥科学的な世界観がもたらす政治的な公的領域への脅威を洞察する。なぜなら近代科学は、人間には想像できないことを語らせることによって、言論を弱体化させるからだ。アーレントによれば、

「厄介なことに、現代の科学的な世界認識の「真理」は、たしかにそれを数式で証明し、技術的には立証できるのだが、もはや普通の言葉や思想の形で表現できない」のであり、だからこそ、「科学者は、言論がもはや力を失った世界の中を動いている」。そして、そうした世界観が支配的になるとき、「本来ならば理解できる事物も理解できなくなるかもしれないし、考えたり話したりすることが永遠にできなくなるということもありうる」と、彼女は危惧するのである。

（戸谷洋志「科学技術をめぐる市民参加の公共性」〈木村史人 他［編著］『アーレントとテクノロジーの問い』所収〉原文一部改変）

注1　ＰＵＳ ―― 公衆の科学理解を意味する言葉。科学に対する一般の人々の理解のあり方のこと（Public Understanding of Science）。

注2　ゲノムひろば ―― ゲノム（遺伝子情報）の研究者が、市民を招いて研究内容を分かりやすく説明したり、質疑応答を行ったりするイベント。

注3　ＥＬＳＩ ―― 倫理的・法的・社会的問題（Ethical, Legal and Social Issues）。

注4　技術官僚 ―― 科学技術や経済運営、社会政策などの高度な専門知識を持つ官僚または管理者。

注5　吉澤―吉澤剛。一九七四年～。科学社会学者。

注6　アースデイ ―― 地球の日。地球の環境保護への支援を示すためのイベントが行われる。

注7　アーレント ―― ハンナ・アーレント。一九〇六～一九七五年。ドイツ出身の政治哲学者。

注8　ガリレオ ―― ガリレオ・ガリレイ。一五六四～一六四二年。イタリアの自然哲学者、天文学者、数学者。

注9　アルキメデス ―― 前二八七～前二一二年。古代ギリシアの数学者、物理学者、技術者、発明家、天文学者。

注10　デカルト ―― ルネ・デカルト。一五九六～一六五〇年。フランスの哲学者、数学者、物理学者。

問1 傍線部①「モデル」と同じ意味で使われているものはどれか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

7

① この小説は実在する人物をモデルにして書かれている。
② 計画経済はもはや経済学のモデルとしては失当である。
③ 子どもへの誕生日のプレゼントは飛行機のプラモデルだ。
④ 今年は新しいモデルの自動車の売れ行きがとても良い。

問2 傍線部②「ゲノムひろば」とはどのような考えに基づく取り組みか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

8

① 科学研究は閉ざされたコミュニティで推進されるものであり、そこで得られた知の第一義的な所有者は科学研究者だという考え。
② 科学研究は専門的知識のある科学者が推進すべきではあるが、市民への真摯な説明義務があることを忘れてはいけないという考え。
③ 科学研究が市民にも理解できるように、科学者が正確かつ理解可能な文脈で市民に専門的知識の情報提供をすべきだという考え。
④ 科学研究は科学者だけではなく、専門的知識のない市民の関与をも促し、両者の議論を通じて推進されるべきだという考え。

問3 傍線部③「専門家の権威を相対的に低下させる」とどのような問題が生じるか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

9

① 科学的真実に対して政治的な信条による評価を市民が下すことに、歯止めをかけることができなくなる。
② 科学に対する市民の信頼度が低下し、かつては行われていた科学による政治統制ができなくなる。
③ 「別の真実」が次々に提示される事態を招き、それを利用する政治に対する不信感も助長してしまう。
④ 技術官僚モデルが社会に広がり、科学研究の知が国家官僚システムの支配下に置かれてしまう。

問4 空欄 X に当てはまる言葉は何か。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

10

① 私の声を、よく耳を澄まして聞いてほしい
② 私の声ではなく、科学に耳を傾けてほしい
③ 私の声と科学の声を、よく聞き比べてほしい
④ 私の声は、科学の声だと信じて聞いてほしい

問5 傍線部A「原理的」・傍線部B「洞察している」・傍線部C「帰結する」の語句の意味の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

11

① A 論理的　B 丁寧に観察している　C 物事が終結する
② A 画一的　B 深く考慮している　C 主題が導かれる
③ A 根本的　B 本質を見抜いている　C 結論付けられる
④ A 本質的　B 強く懸念している　C 決定付けられる

問6 傍線部④「人間の生活に深刻な影響を与えた」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

12

① 認識の軸となる視点が大きく変化し、今まで信じていた自己の感覚への信頼に揺らぎが生じてしまったこと。
② 感覚によって認識していた世界が現実と異なることに気づかされ、技術的な器具を生活に用いるようになったこと。
③ 仮説の域を出なかった科学上の問題が、感覚的な確実さを伴って実証されたことに、恐れと戸惑いを抱いたこと。
④ 「われ思うゆえにわれあり」というデカルトの哲学によって、今まで信じていた理念が根本的に否定されてしまったこと。

問7 空欄 Y に入る表現として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

13

① 現実
② 科学
③ 自己
④ 近代

問8 傍線部⑤「それはリアリティのないもの、自分でも想像できないことを語る、ということになる」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

14

① 科学者が人間の精神に還元されない世界を人間が探究するという矛盾に直面した結果、リアリティを感じる器官である感覚が機能しなくなり、科学探究は先に進まなくなっているということ。
② 世界を正確に分析するために事実をリアルに捉えることができない感覚を人間の精神から排除してしまったがゆえに、科学的な事象を正しく説明できなくなっているということ。
③ 科学探究は知識の源泉であるが、人間自身がリアルに感じる器官である感覚を排除してしまったため、科学的な知識をどのように活用してよいのか分からなくなっているということ。
④ 科学的認識が人間の精神の形式にすべて還元され、リアリティを感じる器官である感覚が否定された結果、人間は想像不可能な科学的事象について議論することになったということ。

問9 傍線部⑥「科学的な世界観がもたらす政治的な公的領域への脅威」とあるが、どういうことか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 15

① 科学が人間の理解できない世界を扱うようになれば、政治的にコントロールのできない暴走を始めてしまうということ。

② 科学は人間が理解できる形で「真理」を示すことができないので、その世界観が言論一般の力を奪うことがありうるということ。

③ 科学が正確な言説を表明できなくなると、権力者が自分たちの都合にあわせて科学を恣意的に政治利用してしまうということ。

④ 科学が人間の想像できない世界を論じ始めると、科学への信頼が揺らいで、政治が科学に不当に介入してしまうということ。

問10 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 16

① 科学研究を専門家のみに委ねてしまうことはリスクが大きいので、科学技術をめぐる議論への市民参加を促して、科学者自身の見解の偏りを指摘し、科学を社会に適合するものにしていかねばならない。

② 科学が政治的言説から完全に自由とはいえない現状で、科学技術に関する意見を適正に調停するためには、市民だけでなく権威ある専門家も議論に参加して政治家による不当な介入を防ぐ必要がある。

③ 科学技術をめぐり開かれた議論をする際に生じている現在の問題は、近代科学がそれまでとは全く異なる認識の準拠点に立って、様々な現象を技術的器具を用いて知覚可能なものにしていった結果である。

④ この世のあらゆる現象は数式で証明され技術的器具により立証することが可能になったが、それを誰もが理解して説明できるようにならないかぎり、現代の科学的な「真理」として評価できない。

Ⅲ

次の文章は心理学者河合俊雄が、村上春樹の小説「パン屋再襲撃」を例に、出会いについて論じた文章である。「パン屋再襲撃」は、結婚したての夫婦が深夜突然空腹を覚えるのだが、その空腹はかつて夫が若いころに友人と一緒に行ったパン屋襲撃に失敗し、呪縛をかけられたからだと妻は考え、その呪縛を解くためにもう一度パン屋を襲撃しようとけしかける話である。これを読んで後の問いに答えなさい。

①村上春樹の初期の作品における出会いがどういうものであるのかをまず捉えてみることにする。それは初期の作品にとどまらない、出会いにおける本質的なものを示唆すると共に、村上春樹の作品における出会いに含まれる課題、［A］現代における出会いの問題も明らかにしてくれるからである。（略）ここでは「パン屋再襲撃」を初期作品の例として取り上げることにする。

〈パン屋襲撃の話を妻に聞かせたことが正しい選択であったのかどうか、僕にはいまもって確信が持てない。〉

短編はこのような文章ではじまる。それに続けてこれが正しいかどうかの議論が少しあり、それについては次節で取り上げるが、しばらくして〈僕は何はともあれとにかく妻にパン屋襲撃のことを話してしまった〉ということばがある。

ここでは妻に話してしまったということ自体がクローズアップされている。つまり何か起こったことは、②語られることではじめて事実となるからで、語られない限り事実とならない。ここに心理療法で語ることの意味がある。虐待を受けていたこと、辛かったこと、腹が立っていたことは、語られることによってはじめて事実となり、生きたものとなる。事実となるからこそ、そこから新たな展開が生まれてきて、この短編ではパン屋再襲撃に至る。

［B］逆に語られることによって、何かが事実として固定されてしまうリスクも出てきて、それが心理療法や人生において妨げになる場合もある。

何か体験したことを自分一人で抱えていても、それは事実にはならない。だからこそ、何十年も経ってから、犯罪の告白や自首がなされることがある。一人で思っていても、一人だけで知っていても、それは事実にならず、誰かと共有されないといけないのである。

〈僕自身その「パン屋襲撃」という言葉を妻の前で口に出すまで、自分がかつてパン屋を襲撃したことなんて［C］忘れてしまっていたのだ〉というのは興味深い。最初からわかっていることを人は語るのではない。話していると、思わぬことが話され、それには本人にとってすら半ば忘れられていることも含まれている。だからこそ、精神分析における「自由連想」[注1]という方法は有効なのである。自由に語っていると、全く思わぬことが語られ、さらにそれは事実となって、新たな展開を生んでいく。それによってセラピーは進んでいくのである。

語ることを通じて誰かと共有することは非常に大切であるが、共有しようとしながら、十分に共有できないことも生じてくる。そこに相手との出会いと関係の質が問題になってくる。つまり語る相手と出会えていないと、あるいは相手との十分な関係が成立していないと、共有はできないのである。

さらには、語ることによる共有は、［D］全てを共有するのではなくて、共有しない部分も生みだしていく。一度目のパン屋襲撃について語った後、語り手は〈もちろん本当に何も起らなかったというわけではない。はっきりと目に見える具体的なことだっていくつかはちゃんと起ったのだ。しかしそのことについては僕は彼女にしゃべりたくなかった〉としている。語る

際に全てを共有する必要はないし、実際のところしようとしてもすることもできない。話しても共有されないとわかっている場合、話したら壊れてしまうかもしれない場合も存在するのである。③村上春樹の他の作品でも、共有はなされつつも、ある部分については話されないことは非常に多いように思われ、本書のなかでも取り上げていく。しかしここの文脈では、語り手が妻に全てを語らなかったことは、これから話が進行していくなかで妻との共有が不十分なものに終わりそうという兆しが強いように思われる。

冒頭の部分で、語り手は妻にパン屋襲撃について話したことが正しいかどうかについて、少し複雑な議論を自分で展開している。そのなかで〈我々は実際には何ひとつとして選択してはいないのだという立場をとる必要がある〉ということばが出てくる。これに少し注目して、注2デタッチメントとリアリティの関係について考えてみたい。

何かを選択できるためには、主体性がはっきりとしていないといけない。よくある選択の例として、職場からお昼ごはんを食べに行くときにどのお店を選び、さらにはそのお店で何を食べるかを選ぶという話がある。われわれ日本人は、主体性がはっきりしないのか、他の人が何を選ぶのかを気にしたり、他の人に合わせたりする傾向が一般的に強いように思われる。それに対して、主体を中心にして対象を明確にして、何かを選び、他のものを選ばない（否定する）というのは、極めて近代意識の特徴である。選択というのは、何かを選ぶというポジティブな面に注目しがちであるけれども、④他のものを選ばないということであり、否定であるというのは重要な視点であろう。

哲学者のアガンベン注3は、メルヴィル注4作の『バートルビー』を分析するなかで、ライプニッツ注5の分類にも基づきつつ、「可能性」「不可能性」「必然性」「偶有性」注6の四つの様式を挙げている。社会学者の大澤真幸の解説も参照しつつ、それに沿って見ていくと、前近代の世界の特徴は、「必然性」である。つまりコミュニティのなかで、誰と結婚するのか、どの仕事に就くのかなどに関して、必然性があり、それは主体的に選ぶものではなくて、運命や必然に従わないといけない。様式として分類すると、「可能性」が「すること」が「できる」のに対して、「必然性」は、「すること」を「しない」ことが「できない」。それに対してコミュニティから個人が自立した⑤近代意識の特徴は選択することができるという「可能性」である。たとえばアメリカは、ファストフード店から衣料品ショッピングに至るまで、チョイスの文化で成り立っており、その意味で近代意識の極みかもしれない。そして可能性は、不可能性という逆の様態によって補完されている。可能性を求めるけれども、究極的には不可能である、あるいは逆に不可能であるからこそ、可能性を追究するというのは近代意識の欲望の特徴的なところである。

しかし消費文明というのが、主体的にチョイスをしているようで実はコマーシャルなどで誘導されてある特定のチョイスを強いられていることが明らかになってきたためもあろうか、それに与せずに選択しない、選択しないことができるという偶有性というのが生じてくる。これがポスト注7モダンの意識の特徴であろう。つまり何も選ばず、漂い、何にもコミットしないというのは近代意識の否定の後に表れてきたポストモダンの意識であり、またデタッチメントというあり方にも沿っている。選ばず、漂い、移ろっていくなかで、何のリアリティもない。

しかし、孤立して他者とつながっていない人が暴力的な出会いや性的な出会いに遭遇するように、⑥デタッチメントはそのままでは終わらず、強烈なリアリティに直面することになる。それがこの短編では堪えがたいほどの空腹感として現れてくる。

〈そのとき僕にパン屋襲撃のことを思い出させたのは堪えがたいほどの空腹感であった。時刻は夜中の二時前だった。〉

〈それは理不尽と言っていいほどの圧倒的な空腹感だった。〉

しかしこのような強烈なリアリティに直面しながら、二人にはそれに対処する手段がない。〈しかし冷蔵庫の中には食物という名を冠することのできそうな食物は何ひとつとしてなかった。〉

なぜかというと、二人は結婚したばかりで、まだ様々な準備の最中であった。〈我々はその二週間ほど前に結婚したばかりで、食生活に関する共同認識というものをまだ明確に確立してはいなかった。（中略）その頃僕は法律事務所に勤めており、妻はデザイン・スクールで事務の仕事をしていた。僕は二十八か九のどちらかで（どういうわけか結婚した年をどうしても思いだすことができないのだ）、彼女は僕より二年八ヵ月年下だった。〉

これはどのように理解すればよいのであろうか。新婚というのは、結婚という一度目の出会いがあっても、まだ本当の出会いやつながりができていない状態であると考えられる。結婚しても、まだ相手に心理学的には出会えていない人は多いと思われ、それが心理療法を受けることによって明らかになることはしばしばある。それではこの空腹感に二人はどう対処しようというのか。

「車で外に出て、オールナイトのレストランを探そう」と僕は言った。

（中略）

しかし妻はその僕の提案を拒否した。外に出て食事をするのなんて嫌だと彼女は言った。

「夜の十二時を過ぎてから食事をするために外出するなんてどこか間違ってるわ」（中略）

結婚した当初にはありがちなことなのかもしれないが、妻のような意見（乃至はテーゼ）はある種の⑦啓示のように僕の耳に響いた。

この短編は、夫婦関係の物語としても読める。あるいは新婚のときの心理状態を示している。つまり相手にはまだ出会えていないと同時に、相手や相手の考え方が絶対化されている。それは通常の夫婦関係の場合にはのちに相対化されていくのであるが。ともかく語り手は妻の意見に従うのである。

（河合俊雄『村上春樹で出会うこころ』原文一部改変）

注1　自由連想 ―― ある言葉や概念から自由に思い浮かぶ考えや言葉を連想していくこと。無意識的な感情や思考を浮き彫りにするための技法。

注2　デタッチメント ―― 物事にかかわりを持たず、孤立しているさま。無関心な態度。

注3　アガンベン ―― ジョルジョ・アガンベン。一九四二年～。イタリアの哲学者。

注4　メルヴィル ―― ハーマン・メルヴィル。一八一九～一八九一年。アメリカの作家。

注5　ライプニッツ ―― ゴットフリート・ライプニッツ。一六四六～一七一六年。ドイツの哲学者、数学者。

注6　偶有性 ―― 事物の本質的ではなく、偶然的な性質。

注7　ポストモダン ―― 近代の思想を超えようとする潮流。

問1 傍線部①「村上春樹の初期の作品における出会い」に関する説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 17

① 人は出会った相手に自分の経験を語ることでそれが事実となり、新たな展開が生じる一方、何かが自分の中に固定されたりもする。

② 人は他者から十分な理解が得られない場合には、自分自身の体験を語りそれを共有しようとする。

③ 人は他者との十分な関係が成立しない場合でも、その相手に何を語り、何を語らないかということを、主体的に決めている。

④ 人は出会った相手に自分の経験を語る中で、今まで自分が認めたくなかった自分の本当の姿を直視せざるを得なくなってしまう。

問2 空欄A～Dに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 18

① A もしくは　B だから　C ほぼ　D ただ

② A くわえて　B とはいえ　C たしかに　D むしろ

③ A さらには　B すなわち　C まるで　D 単に

④ A ひいては　B しかし　C すっかり　D 必ずしも

問3 傍線部②「語られることではじめて事実となる」とは、ここではどういう意味か。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 19

① 事実は、事実であることによって語られることになる。

② 語られないうちは、出来事は事実としては認識されない。

③ 何かが起きるとは、語られることと不可分一体である。

④ 何が起きたかということは、語られない限り分からない。

問4 傍線部③「村上春樹の他の作品」として正しいものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 20

① セロ弾きのゴーシュ

② 走れメロス

③ ノルウェイの森

④ コンビニ人間

問5 傍線部④「他のものを選ばないということであり、否定であるというのは重要な視点であろう」とあるが、なぜか。本文の展開を踏まえて最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

21

① 何かを選ばないというとき、主体的に否定するばかりでなく、ただ「何も選ばない」という偶有的な否定があることも示唆しているから。

② 何かを選択する場合、「選ぶ」という行為ばかりでなく、「選ばない」という行為も主体的な選択であることに気づかせてくれるから。

③ 他人の選択ばかり気にする日本人の傾向を、他人と違うものを「選ばない」という主体的な選択として意味づけ直すことができるから。

④ 選択の対象を明確にし、他のものを否定する主体的な態度が、近代的な意識の特徴であることを明らかにするから。

問6 傍線部⑤「近代意識の特徴」とあるが、ここで筆者は「前近代」との違いをどのように考えているのか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

22

① 前近代では「できる」ということが必然とされるのに対し、近代では「できない」と考えることから可能性の追究がはじまる。

② 何かを選ぶとき、前近代では自由な選択が「できない」のに対し、近代では様々な選択肢の中から任意のものを選ぶことが「できる」。

③ 前近代では「できる」ことと「できない」ことを別の概念だと考えるのに対し、近代では両者を同じ概念として捉えている。

④ 運命に従わなければならない前近代では選ばないことが「できない」のに対し、近代では何も選ばないことも「できる」自由がある。

問7 傍線部⑥「デタッチメントはそのままでは終わらず、強烈なリアリティに直面する」とはどういうことか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

23

① 近代的な意識を否定してポストモダンを生きる人々も、一人の人間として消費社会を生きている以上、現実を否定することはできず、むしろそれに大きく振り回されている。

② 何も選ばず、コミットできず、移ろうだけのデタッチメントを生きる者であっても、それを最後まで貫くことはできず、やがては強烈なリアリティを求めて街にさまよい出てしまう。

③ 主体的に何かを選びながら生きる現代人にとっては、何も選ばないことも主体的な選択であり、決して何もしない日々を生きているわけではなく、それが彼らのリアリティなのである。

④ ポストモダンを生きる人々は、日々を浮遊し何も選ばない生き方をしており、リアリティのない日々を送っているように見えるが、感覚を通じて、強烈なリアリティを経験している。

問8 傍線部⑦「啓示のように僕の耳に響いた」とは、ここではどういう意味か。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

24

① 逆らうことのできない怖さがあるように感じた。

② 神秘的な魅力をたたえているように映った。

③ 人知の及ばない真理があるように思われた。

④ とても強いこだわりがあるように聞こえた。

問9 本文の内容と合致するものを、次の①～⑥の中から**二つ**選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。

25 ・ **26**

① 村上春樹のどの作品にも一貫して示されているデタッチメントの視点は、近代から現代まで、主体的に選択しながら社会を生きなければならない人々の苦悩と悲しみを明確に浮き上がらせている。

② 「パン屋再襲撃」には、認めたくない事実はあえて語らずに隠蔽し続け、やがて自分もそのことを忘れてしまえば、もはやどこにも事実はなかったことになるという物事の本質が描かれている。

③ 消費者が自ら何を消費するかを選択するのではなく、コマーシャルなどで選択を誘導されているに過ぎず、その意味でリアリティのない社会を消費社会と呼ぶことができる。

④ 選択という行為において、他のものは選ばないという主体的非選択のほか、ただ選ばない、という偶有的非選択も存在し、選択という行為には複雑さや多様さがあるといえる。

⑤ 自己と他者の関係が成熟していくにつれて、あえて語らずとも意思の疎通ができる関係が構築されるが、そのような関係は近代意識を克服したポストモダン社会の一つの到達点である。

⑥ 十分に出会えていない、あるいはすべてを語らない関係にあるとしても、それゆえに二人の関係が希薄であるとは限らず、一方が他方を絶対化してしまうこともあり得る。

Ⅳ

次の文章は、帝が院の御所へ行幸する場面で、登場人物のうち大臣（内の大臣）と中将（三位の中将）は父子の関係である。中将は女院の屋敷で、ある女と出会う。これを読み、後の問いに答えなさい。

注1事定まりて、行幸のさま、御親しきかぎりの、あまた上達部にて仕うまつり給へるは、a珍かに世の人も思ふべかめり。院には、待ちつけさせ給うて、御遊びのさまざま思しけるに、注2藐姑射の山の桜花、行幸を待ち得けるにや、こよなう匂ひわたるを、右大将をして手折らせ給ひ、御前に大きなる青甕を据ゑさせ給うて、挿されけるを、「いかで、ただには」と、仰せ言、ありければ、

ア木の下はさながら春の色見えて雲居に紛ふ桜花かな

注3御土器とりどりなりけるに、楽を奏すべき人々を選ばせて、中将に桜を賜はせければ、注4越天楽を舞ひ出で給へるに、注5御前に弾かさせ給へる御琴の音の紛るるかたなく、藤大納言の注6玄上を弾じ給ひけるは、また、あるべくもあらざるさへ、御琴の音には気圧され給へるぞかし。左大将の御笛の、聴きにくからぬはc、さこそと、思ひやらるる注7間こそ。

A院より、中将に御衣被けさせ給へば、大臣の耐へず思して立ちて舞ひけるも、珍かに、見え給へり。

明けぬれば、注8女院の御かたへ、渡らせ給へるに、長橋の左右に桜を植ゑさせければ、御衣の御袂に香ばしき風の訪るるは、この世ならぬ御心地ぞせさせ給へる。こなたには、女御・二位殿・左大将の上など候はせ給へり。（中略）女院は、昨日、イ舞を御覧じ給はで、御心に懸けさせ給へるにやd、二位殿に、「いと久しく聞かせ給はで、ゆかしくこそ」とて、ウ琴をまゐらせ給へば、「途絶えて手馴れ候はねば、いかが」とのたまはすれども、強ひて仰せ言ありければ、引き寄せ給へり。

女御の御前には、琵琶をまゐらせ給ひて、「笛こそなけれ、左大将のいますべけれども、内の大臣こそよからめ」と召され給うて、エ「笛のなければ、いかがはせん。それには、よも吹かせ給はじ」と、のたまはすれば、「ほかの人をも交へ給はで、勤めんは、いと面目にこそ」と、うち笑ませ給へれば、御前なる花籠に柳・桜の挿されけるを、中将に御手づから賜はせて、B「舞ひぬべき人は、あまたあるべけれど、注9柳花苑を舞ひ交へなば本意なかるべけれ」とのたまはすれば、やがて柳花苑を舞ひ給へり。こなたにては、もの静かに、わたらせ給へば、昨日には優りて聞こえさせ給へり。「禄賜はらんよりは」とて、三位に、なさせ給へり。

暮れつかたより、御池の汀に、注10篝焚かせて、御舟にて、御遊びのありけるに、三位の中将は、島先の、岩の上にゐ給へるに、舟の中より「その山吹、一枝折りて」と、いとをかしき声にて、聞こえければ、

［Ⅰ］池水に影を映して咲く花のそこの心はさこそ見ゆらめ

とて、嘆かせ給へば、舟は行き過ぎぬ。

（『松陰中納言物語』）

注1　事定まりて ―― 行事の次第が決まって。
注2　藐姑射の山 ―― 上皇の御所を祝っていう言葉。
注3　御土器とりどりなりけるに ―― 宴もたけなわであった時に。
注4　越天楽 ―― 雅楽の曲名。
注5　御前 ―― ここでは帝のこと。
注6　玄上 ―― 楽器の名。琵琶の名器とされる。
注7　間こそ ―― この後に、「左大将への期待は裏切られた」などの脱落文が想定される。帝の琴や藤大納言の琵琶の演奏に合わせるものとして、左大将の笛はそれほどではなかったということ。
注8　女院の御かたへ、渡らせ給へる ―― 帝が女院のいらっしゃる方へ、お供の者たちと一緒に移動される。
注9　柳花苑 ―― 雅楽の曲名。
注10　篝 ―― 夜間の警備や照明のためにたく火。

問1　傍線部ア・イ・エの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

27　ア「雲居に紛ふ桜花かな」
① 白雲と見分けがつかないほどの桜の花であるよ
② 宮中に紛れ込んで咲く桜の花があるのかなあ
③ 雲の中にいるような心地にさせる桜の花だなあ
④ 白雲と一体化して人の心を惑わせる桜の花なのか

28　イ「舞を御覧じ給はで」
① 舞をご存じではなく
② 舞をご覧に入れないで
③ 舞をご覧にならないで
④ 舞をご覧になられたので

29　エ「笛のなければ、いかがはせん」
① 笛がなかったので、どうしたものか
② 笛がないと、どうしようもない
③ 笛がないのなら、どのようにするのか
④ 笛が鳴らなければ、どうするべきか

問2 傍線部ウ「琴をまゐらせ給へば」で用いられている敬語の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 30

① 二位殿への敬意を表す尊敬語「まゐらす」と、女院への敬意を表す尊敬語「給ふ」が用いられている。

② 女院への敬意を表す尊敬語「まゐる」と、二位殿への敬意を表す二重尊敬「せ給ふ」が用いられている。

③ 女院への敬意を表す謙譲語「まゐらす」と謙譲語「給ふ」が二重に用いられているが、二位殿への敬意を表す表現はない。

④ 二位殿への敬意を表す謙譲語「まゐる」と、女院への敬意を表す二重尊敬「せ給ふ」が用いられている。

問3 二重傍線部a～dの助動詞について、意味と終止形の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 31

① a―尊敬「る」　b―尊敬「す」　c―打消「ず」　d―完了「ぬ」

② a―自発「る」　b―使役「す」　c―完了「ぬ」　d―断定「なり」

③ a―存続「り」　b―使役「す」　c―打消「ず」　d―断定「なり」

④ a―存続「り」　b―尊敬「す」　c―完了「ぬ」　d―完了「ぬ」

問4 波線部A「院より、中将に御衣被けさせ給へば、大臣の耐へず思して立ちて舞ひける」とあるが、この時の大臣の心情の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 32

① 中将が日ごろの忠勤を高く評価され、院からも褒美をいただいたので、父親として誇らしく思う気持ちを隠しきれない。

② 桜の枝を授かり越天楽を舞った中将に、院が褒美をお与えになったので、父親として感に堪えないほど喜んでいる。

③ 中将が越天楽の舞で注目を浴び、院から褒美の御衣までいただいたので、自分も息子に負けずに舞を披露したいと思っている。

④ 褒美の御衣を院みずからお掛けになるのは珍しいので、父親として感激するとともに息子に対する嫉妬心が芽生えている。

問5 波線部B「舞ひぬべき人は、あまたあるべけれど、交へなば本意なかるべけれ」とはどういうことを述べているのか。その内容を説明したものとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 33

① 舞いたい人はたくさんいるにちがいないが、中将を交えて舞うのでなければ、きっと不本意なできになるはずだということ。

② 舞うことができそうにない人がたくさんいるので、舞手に中将を交えなかったら、残念な結果になるにちがいないということ。

③ 舞うことができる人はたくさんいそうだけれども、中将が他の人を交えて舞うなら、大臣は物足りなく思うはずだということ。

④ 舞う人はたくさんいるにちがいないが、舞手として中将以外の人を交えたら、期待外れなことになるだろうということ。

問6 〔Ⅰ〕の和歌に関する説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 34

① 自分を池の水に姿を映している花になぞらえ、あなたを思う私の心はお察しでしょうと、中将が舟の中の女に詠みかけている。

② 女を池の底に暗い影を落としている花に見立て、思いが届かない私の心をどうしようかと、中将が舟の中の女に詠みかけている。

③ 自分を池の水に姿を映す清らかな花にたとえ、あなたを思う私の真心はご存じでしょうと、舟の中の女が中将に詠みかけている。

④ 中将を池の水に姿を映す鮮やかな花に見立て、あなたを思う私の心をお察しくださいと、舟の中の女が中将に詠みかけている。

問7 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 35

① 院は帝を迎えるのに宴（うたげ）での音楽をいろいろ考えて楽しみにしていたが、院の御所の桜の見ごろは過ぎてしまっていた。

② 帝の弾く琴の音は際立っていて、藤大納言が弾くすばらしい玄上でさえ、琴の音に圧倒されるほどであった。

③ 女院は大臣に笛を吹くことを所望したが、大臣は左大将をさしおいて演奏するのは面目ないことだと笑って断った。

④ 女院の所で柳花苑をみごとに舞った中将は、褒美の品をいただくより三位に昇進させてほしいと申し出た。

問8 破線部「御前に大きなる青甕を据ゑさせ給うて、挿されけるを」は、平安時代の随筆の「高欄のもとに青き甕の大きなるを据ゑて、桜のいみじうおもしろき枝の五尺ばかりを、いと多く挿したれば」という記述を引いていると考えられている。ここで踏まえられている先行文学として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 36

① 『古事記』
② 『伊勢物語』
③ 『枕草子』
④ 『徒然草』

国語の問題はここまでです。